

## 作業現場で考えた 10 のこと

四国災害アーカイブスは、4月から本格的な運用を開始します。こつこつと長く作業を続けてきて、何とか目途が立ちつつあるところです。この間、企画、資料収集、資料整理、現地調査などに携わって、作業現場で考えたことをお伝えします。

第一に、災害記録を後世に伝えたいという思いです。四国各地には文献資料、写真、石碑などいろいろな形で災害記録が残されています。これら将来に役立つ情報をできるだけ蓄積して、後世の人々が活用できるようにしたいということです。

第二に、原資料の尊重です。内容に明らかな間違いがある場合などは修正していますが、多くの資料には原著者の努力や思いが込められていますので、できるだけ原資料を尊重しています。それは過去の資料を利用させてもらう者の礼儀だと考えています。

第三に、分かりやすい概要の整理です。原資料を尊重するとしても、災害の状況や被害の様子、人々の対応などを200字程度にまとめる際に、書かれている文章をただ単に要約しても、読み手に意味が伝わらないことがあります。必要な時には、過去からの経緯や社会的な背景などを踏まえて文章を補うなど、分かりやすく整理するようにしています。

第四に、身近な所に災害の歴史があることを伝えたいということです。皆さんが住んでいる地域で、いつ、どんな災害があったのか、その災害に人々がどのように対応したかは、年配の方や郷土史家、専門家などには知られていても、多くの住民の方には知られていないこともあります。歴史に学ぶことは将来を生きる上での第一歩だと考えています。

第五に、災害にまつわる石碑や痕跡などを訪れていただきたいということです。石碑や痕跡などをたずねることは、先人の思いを感じ、災害や地域のことを考えるきっかけになりますので、できるだけ現場の地図や写真、位置情報を提供するようにしています。

第六に、私たちの生活は災害と闘ってきた人がいたおかげで成り立っているということです。人物辞典や歴史書などに出てくる著名人だけでなく、一般にはあまり知られていないものの、実際に地域を支えていた人たちにも光を当てるようにしています。

第七に、人としての生き方を学ぶことができるということです。災害記録には、きれいな事だけではなく、自分だけ助かれればいいという行いや地域間の対立なども記されています。一方で、災害時や被災後の献身的な人の活動ぶり、人々の助け合いの様子なども知ることができます。災害の歴史は、苦境に陥った中での人としての生き方も教えてくれます。

第八に、社会資本整備の大切さです。災害を契機に河川や海岸、道路、砂防、用水などの事業が行われ、災害の防止や被害の軽減に役立ってきました。人々は、事業実施直後にはありがたみを感じるものの、時が経つにつれて今の状況が当たり前であるかのように考えがちです。災害の歴史に学ぶことは、過去からの経緯を思い起こさせてくれます。

第九に、情報の活用についてです。WEBサイトの「活用の手引き」に活用方法を例示していますが、きれいな図表をつくるのが目的ではありません。意識してデータを眺めていると、歴史が語りかけてきます。自ら考えて、活用方法を工夫していただきたいです。

そして最後に、四国の皆さんに育てていただきたいということです。四国災害アーカイブスは本格的運用で完成するのではなく、出発点に立ちます。皆さんには温かくお見守りいただき、これからも情報提供や前向きなご意見をいただければと考えています。